Bulletin of Aichi Univ. of Education, 66（Humanities and Social Sciences）, pp. 103 − 116, March, 2017

「使用」を表す機能動詞構造について

納谷 昌宏

外国語教育講座（ドイツ語）

Über die Funktionsverbgefüge mit den Nomina Actioni „Gebrauch“ und „Verwendung“

Masahiro NAYA

Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

0　はじめに

機能動詞構造とは動詞を名詞化し、これを文法的機能だけを有する機能動詞と共に用いる表現形式のことである。動詞を名詞化したものをデキゴト名詞、機能動詞構造が生成される元の動詞を基礎動詞と呼ぶ。さて、次のドイツ語の基礎動詞 gebrauchen と verwenden は、共に「使用する」という意味を表す動詞である。次の（1a）は動詞 gebrauchen を用いた文であり、ナイフを使用することが表されている。

（1a）Er gebraucht das Messer.

（1a）は次の（1b）のように機能動詞 machen を用いて書き換えることが可能であるが、（1c）のように機能動詞 finden を用いた受動文は可能ではない。

（1b）Er macht Gebrauch von dem Messer.
（1c）*Das Messer findet Gebrauch.

次の（2a）は動詞 verwenden を用いた文であり、お金を使用することが表されている。

（2a）Er verwendet das Geld.

この（2a）は次の（2b）のように機能動詞 machen を用いて書き換えることは出来ないが、（2c）のように機能動詞 finden を用いた受動文が可能である。

（2b）*Er macht Verwendung von dem Geld.
（2c）Das Geld findet Verwendung.

このように動詞gebrauchenとverwendenは、同じ「使用する」という意味を有していても、機能動詞構造の生成という点ではそれぞれ振る舞いが異なる。これはgebrauchenとverwendenの意味構造の相違に基づくものであると考えられる。本稿の目的は「使用」の意味を表す動詞と機能動詞構造による表現を比較し、それぞれの特徴を分析するとともに、如何なるメカニズムに基づいて機能動詞構造が生成されるのかを分析することである。分析の手順は次の通りである。

1）基礎動詞gebrauchenとverwendenの意味構造を明らかにし、（第1章）
2）機能動詞構造による表現の特徴を分析するとともに、（第2章）
3）機能動詞構造の生成メカニズムを明らかにする。（第3章）

本稿で特に「使用」の意味を表す動詞を取り上げるのは、類義語の中でも動詞gebrauchen、verwendenの意味の区別や、機能動詞構造Gebrauch machen、Verwendung findenの使用方法がドイツ語の非母語話者には極めて難しく、生成メカニズムについても未解明の部分が多いからである。

1　基礎動詞gebrauchenとverwendenの意味構造

まず動詞gebrauchenとverwendenについて、辞書の記述を見てみよう。まずgebrauchenについてDudenには次のような記述がある。[1]

（gebrauchen）
a）*verwenden*, *benutzen*：Hammer und Zange g., eine Sache g.
b）*anwenden*：seine Schußwaffe, Gewalt, den Verstand, eine List g.
c）*äußern*：derbe Worte g.
d）*Med. einnehmen*：Tabletten g.

Duden（1977）の記述によると、動詞gebrauchenの4格目的語はハンマーやペンチなどの事物、銃や暴力、策略や言葉、そして病気を治すための錠剤などである。これらの名詞は、何らかの目的を実現させるための「道具」として見做されるものではあるまいか。このことを実際の例で確かめてみよう。次はCosmas IIを用いて収集した事例の一部である。[2]

（3）　Andi sitzt oft stundenlang zu Hause und brütet nach. Eigentlich möchte er <u>seine Hände</u> gebrauchen, möchte irgendwo nützlich sein, möchte die alltägliche Langeweile unterbrechen.
（Ressort: TB-ROM (Abk.); Die Schule zu Ende... und kein Job, 30.08.1997）
アンディはよく何時間も家で座ってじっくり考えた。本来彼は自分の手を使い、何かの役に立てて、日常の退屈さを解消したかったはずだ。

例（3）では動詞gebrauchenの目的語としてHände「手」（下線部）が置かれている。「手」

は人間の身体の一部であり、利用されることによって量が減ったりするものではない。「手」も人間が使用できる「道具」と見做してよかろう。このように動詞gebrauchenの目的語は、結果的に変化しないものなのである。

（4） «Die Frau kann den Schein dazu gebrauchen, ihr Kind straffrei abtreiben zu lassen», schreibt Papst Johannes Paul II.（Ressort: TB-AUS (Abk.); «Beratung ohne Schein ist scheinheilig» 28.01.1998,）
「その女性は自分の子供が無罪となるように、その証明書を用いることが出来る」と法王ヨハネ・パウロ２世は署名した。

例（4）では目的語としてSchein「証明書」が置かれている。「証明書」はいくら使用してもその価値が変化したりするものではない。特定の目的を遂行するために用いられる一種の「道具」なのである。このように動詞gebrauchenの４格目的語として置かれる名詞は変化するものではなく、既に使用の目的が決まっている「道具」である。従って動詞gebrauchenは「行為中心」の他動詞と言うことが出来よう。以下、実際に取集したコーパスの事例から、動詞gebrauchenの４格目的語として置かれた名詞を挙げておこう。[3]

gebrauchenの４格目的語として置かれる名詞（COSMAS IIコーパス）
seine Zähne, den Humor, Kraft, Hilfskräfte, Metapher, seine Hände,
seine Verbindungen, eine Reduzierung, diese Würdigung, seine Rechte,
die Sprache, den Erlös, den Stein, ihre eigene Mundart, diese Halle,
die Rute,ihr Wissen und Können, ihr Radarwarngerät, Waffen usw.

次に動詞verwendenに関するDudenの記述を見てみよう。[4]

（verwenden）
a）*für einen bestimmten Zweck, zur Herstellung, Ausführung von etw. benutzen, anwenden*
zum Kochen nur Butter v. , im Unterricht ein bestimmtes Lehrbuch v.
b）*etw. für etw. aufwenden*
Zeit, Mühe, Sorgfalt auf etw. v. , sein Geld für/zu v.
c）*imdn.für bestimmte Arbeit einsetzen*
Er ist so ungeschickt, man kann ihn zu nichts v.
d）*in bezug auf Kenntnisse, Fertigkeiten nutzen, verwerten*
hier kann er seine mathematischen Kenntnisse gut verwenden

上記のa）では動詞verwendenの４格目的語としてButterやLehrbuchが置かれることが記載されている。料理することによりバターは変化する。これに対して授業することにより教科書が物質的に変化することはない。しかしここで形容詞bestimmtが付加されていることに注意したい。一般的な授業の道具としての教科書ではなく、特定の教科書であること

により、その教科書が役に立つかどうかどうかが問題となっている。ここでは教科書の価値変化が認められるのではあるまいか。次のb）の例を見てみよう。動詞verwendenの4格目的語としてZeit, Mühe, Sorgfalt, Geldが置かれることが記載されている。「お金」は使用により減るとしても、「時間」や「努力」、「注意」が使用により減ることはない。しかしここでaufwenden「消費する」という説明がある点に注意したい。ここでは「努力」や「注意」も「お金」と使用により同様に減るものとして捉えられているのではなかろうか。c）では4格目的語としてihnが置かれているが、これは「彼の働きの程度」が問題となっており、目的語の変化を前提とした表現であるのは明白である。d）では4格目的語としてKenntnisseが置かれている。しかしここでも一般的な知識ではなく、mathematischという形容詞が置かれている点に着目したい。「数学の知識」が役に立つかどうかが問題となっており、やはり価値変化を前提とした表現であると考えられるのである。このように動詞verwendenの4格目的語は、結果的に変化するものなのである。このことをコーパスの例で確かめてみよう。たとえば、

（5） Die Gastwirtschaftsbetriebe der Säntisbahn AG werden Käse und andere Milchprodukte aus der Alpschaukäserei auch bei der Zubereitung von Speisen verwenden.（Ressort: AT-KAP (Abk.); Bald ist der erste «Schwägalp-Käse» reif, 18.06.1997）
ゼンティス鉄道のレストラン経営者はアルプシャウチーズ製造所のチーズとその他の乳製品を食事の調理に使うでしょう。

例（5）では4格目的語として「チーズとその他の乳製品」（下線部）が置かれている。調理によりチーズや乳製品は物理的に変化するが、特定のチーズ製造所の製品である点に注意したい。“aus der Alpschaukäserei”という句が置かれることにより、その製品の価値が問題になっている。動詞verwendenは、4格目的語として置かれた名詞の存在価値の変化を前提としているのである。

（6） Wörter wie «Judenschule», «abjuden» sind feste Bestandteile unserer Alltagssprache. Politiker und Leute aus der Wirtschaft verwenden Wörter, die nicht selbstverständlich sind.（Ressort: TB-OT (Abk.); Diskussion über den Judenhass, 28.05.1997）
“Judenschule”や“abjuden”などの語は我々が日常に使う語彙の一部分である。
政治家や経済界出身の人々は自明ではない語を使うものである。

例（6）の場合も「自明ではない語」という特定のものであることに注意したい。ここでも「語」の存在価値が問題となっている。動詞gebrauchenでも4格目的語に“Wort”が置かれることがある。（既述のDudenの項目を参照：derbe Worte g.）しかしこの場合は相手を傷つけるための道具としての「語」が問題となっている。テーマは相手にあり、「語」の存在価値がテーマでははない。これに対して動詞verwendenの場合は「語」の存在価値そのものが問題となっている。次に実際に取集したコーパスの事例から、動詞verwendenの4格目的語として置かれた名詞の一部を以下に挙げておこう。

verwendenの4格目的語として置かれる名詞（COSMAS IIコーパス）

dasselbe Telefonprogramm, die 100 Millionen, Teerfarbstoffe, Produkt,
den ideologisch weniger belegten Ausdruck, indische Software,
rassistische und antisemitische Slogans, die Gentechnologie,
familientherapeutische Techniken, das Motiv der «Schlümpfe» usw.

上に挙げられた語を見ると、使用により物理的に変化するもの、あるいは特殊な語で存在価値が変化するものであると言えよう。動詞gebrauchenの4格目的語は変化しない「道具」であり、動詞は「行為中心」の意味を有している。これに対して動詞verwendenの4格目的語は物理的に変化するモノ、あるいは存在価値が変化するモノである。[5] こうした分析結果から動詞verwendenは「結果中心」の意味を有すると言えるのではなかろうか。同じ「使用」の意味を表す動詞であっても、gebrauchenとverwendenには「行為中心」と「結果中心」という意味構造の差が存在するのである。[6]

2　機能動詞構造の表現機能について

機能動詞構造はそもそも基礎動詞による表現とどのように異なるのであろうか。本章ではコーパスを用いた実証的な分析により、機能動詞構造の表現機能を明らかにしたいと思う。次の（7）は機能動詞構造Gebrauch machenの例である。

（7）　Theoretisch wäre ein Weiterzug dieses Urteils an das Bundesgericht möglich. Ob er von dieser Möglichkeit Gebrauch machen werde, wisse er noch nicht, sagte Weber gestern.（Ressort: wv-wil (Abk.); Kein Freispruch, 10.05.1997）
理論的には連邦裁判所における判決について訴訟を継続することは可能である。彼がその可能性を利用するかどうかは未だわからないと、昨日ヴェーバー氏が述べた。

例（7）の下線で示した語句“von dieser Möglichkeiten”は、本来基礎動詞では4格目的語として置かれるはずのものである。機能動詞構造Gebrauch machenの対象はこのようにvon前置詞句によって表される。なおここで述べられたMöglichkeiten（可能性）であるが、コーパスCosmas IIを用いて収集した150の事例のうち、von前置詞の目的語としてMöglichkeitが置かれるのは31例あった。機能動詞構造Gebrauch machenの対象となる名詞は、圧倒的にMöglichkeit, Angebot, Rechtが多く、この3つの名詞だけで約6割を占めるのである。以下、von前置詞句として置かれた名詞の一部を挙げておこう。[7]

Gebrauch machenのvon前置詞句に置かれる名詞（ランダム150例を頻度調査）

Möglichkeit 31, Angebot 28, Recht 26, Dienstleistung 3, Gelegenheit 2, Freiheit 2,
Hilfe1, Einkaufsgelegenheit 1, Freizeitvergnügen 1, Anspruch 1, Machtstellung 1,
Empfehlung 1, Dienst 1, Aktion 1, Vorschlag 1, Zeit 1, Offerte 1,

Verantwortung 1, Verfahren 1, Redewendung 1, Kompetenz 1, Ausnahmeartikel1 usw.

以上の名詞を見ると、抽象名詞が多いことに気が付く。第2章で基礎動詞gebrauchenの4格目的語として置かれる名詞は「道具」であることを確認したが、機能動詞構造Gebrauch machenのvon前置詞句に置かれる名詞は具象的な「道具」ではなく、抽象名詞が多い。基礎動詞から機能動詞構造が生成される際、基礎動詞の4格目的語で表された項にデキゴト名詞が置かれ、本来の4格目的語はvon前置詞句に格下げされる。こうにして機能動詞構造による表現は、「行為中心」の意味がさらに強調されることになる。von前置詞句に抽象名詞が置かれることが多いという事実は、具象的な事物を使用するという意味が失われるということであり、これも「行為中心」の意味の強調を反映しているのである。

(8) Steuergelder dürfen weder für Erschliessung noch Betrieb verwendet werden.（Ressort: TB-BIZ (Abk.); Einheitliche Regeln für ganze Gemeinde, 10.05.1997）
税金は開発や営業のために用いられてはならない。

例(8)はverwendenの受動文である。[8] 使用の目的がfür前置詞句で表されている。このように目的がfür前置詞句で表現される例は150例のうち60例あった。また使用の目的がzu前置詞句によって表示される例が21例あった。つまり計81例となり、150例のうち55％が使用の目的の表示が行われる。さて使用の状況がin前置詞句で表示される例は16例（10％）、als句で表示される例が10例（6.5％）、そしてbei前置詞句で表示される例が6例（4％）あった。つまり使用の状況が表示されるのは計32例であり、これは全事例の21％に相当する。次に機能動詞構造Verwendung findenの例を挙げておこう。

(9) Es ist kaum zu glauben, für welch verschiedene Zwecke eine Röstipfanne Verwendung finden kann!（Ressort: TT-NEU (Abk.); Jauchzer in den Abendhimmel, 17.07.1998）
ジャガイモ料理のフライパンが何とさまざまな目的のために用いられ得るのか、これはほとんど信じられないことである。

例(9)では使用の目的がfür前置詞句で表示されている。機能動詞構造Verwendung findenでは、使用の目的がfür前置詞句される例が37例あった。しかしzu前置詞句で表示される例は僅か1例しかなかった。このように使用の目的が表示されるのは計38例（25％）となり、使用の目的が55％以上の例で表示される受動表現verwendet werdenに比べるとかなり少ない。なお、動作主がvon前置詞句により表示される例は、機能動詞構造Verwendun findenによる表現の場合皆無であった。受動表現verwendet werdenの場合、von前置詞句により動作主が表示されるのは3％である。しばしば受動表現の役割は動作主を削除する点にあると言われるが、von前置詞句の付加可能性を残していることにより、動作主の存在を前提とした表現であることに変わりない。これに対して機能動詞構造による受動表現は、動作主の表示を完全に削除する表現形式であると言えるであろう。

（10）Ihre Präsidentin Elisabeth Ackermann freut sich, dass bei der Heizung Sonnenenergie Verwendung findet.（Ressort: RT-NAB (Abk.); Wärmebedarf aus Solar- und Gasenergie, 17.11.1997）
あなたのエリザベス･アッカーマン社長は、太陽エネルギーが暖房に使われるのを喜んでいる。

例（10）では使用の状況がbei前置詞句により表示されている。このように使用の状況がbei前置詞句により表示されるのは13例あった。その他in前置詞句により使用の状況が表示される例が27例、またals句により表示されるのが17例あった。つまり使用の状況が表示される例が計57例あることになり、これは全事例の40％に相当する。受動表現verwendet werdenにおいて使用の状況が表示されるのは全事例の21％なので、機能動詞構造Verwendung findenによる表現の場合、使用の状況が表示される例は約2倍ということになる。なお次のように、デキゴト名詞Verwendungに形容詞が付加される例がある。

sinnvolle V., neue V., militärische V., weitere V., breitere V., andere V. usw.

こうした形容詞の付加は受動表現verwendet werdenでば副詞を用いて表現せざるを得ない。受動表現ではこうした副詞による表示はなく、形容詞の付加は機能動詞構造に特徴的なものであると言えよう。形容詞がデキゴト名詞に付加される例は150例のうち18例（12％）あった。その事例の一部を次に挙げておこう。因みにデキゴト名詞Gebrauchに形容詞が付加される例は見出されなかった。以上の結果を次にまとめておこう。

・動詞gebrauchenは「行為中心」、verwendenは「結果中心」の意味を有する。
・動詞gebrauchenの4格目的語は変化を前提としない「道具」、verwendenの4格目的語は変化を前提とする一般的な事物である。
・機能動詞構造Gebrauch machenはgebrauchenの書き換え、Verwendung findenはverwendenの受動に相当する。
・機能動詞構造Gebrauch machenのvon前置詞句に置かれるのは抽象名詞である。Verwendung findenの主語にはそのような制限はない。
・デキゴト名詞Gebrauchに形容詞が付加されることはないが、Verwendungに形容詞が付加されるのは12％の例に見られる。

	意味	行為の対象の表示	形容詞の付加
Gebrauch machen	行為中心の強調	von前置詞句（抽象名詞）	0％
Verwendung finden	結果中心の強調	主語	12％

以上の事実は動詞gebrauchenは行為中心の意味を有し、機能動詞構造Gebrauch machenはさらに行為中心の意味が強調されること、また動詞verwendenは結果中心の意味を有し、

機能動詞構造Verwendung findenはさらに結果中心の意味が強調されることを示すものである。形容詞の付加も結果中心の意味の強調を裏付けるものである。結果的状況が形容詞により表現されるからである。次は受動態verwendet werdenと機能動詞構造Verwendung findenの比較により明らかになった点である。

・受動表現verwendet werdenではvon前置詞句により動作主が表示される場合がある。（3％）しかし機能動詞構造Verwendung findenでは動作主の表示は皆無である。
・受動表現verwendet werdenでは目的を表す前置詞句（für～, zu～）の表示が約55％の事例において見られるが、Verwendung findenでは約25％にしかすぎない。
・受動表現verwendet werdenでは状況を表す前置詞句（in～, als～, bei～）の表示が約21％、機能動詞構造Verwendung findenでは約40％において見られる。

	動作主の表示（von）	目的の表示	状況の表示
verwendet werden	3％	55％	21％
Verwendung finden	0％	25％	40％

このように機能動詞構造Verwendung findenの特徴は、完全に結果（コトの成り行き）だけが取り出された表現であると言えるであろう。目的の表示が少なく状況の表示が多いことも、これを裏付けるものである。動作主の表示が皆無であることも、動作主の存在を前提とする受動表現verwendet werdenとは異なる点である。

3 生成メカニズム[9]

本章では基礎動詞gebrauchenから機能動詞構造Gebrauch machenが生成されるメカニズムを、また基礎動詞verwendenから機能動詞構造Verwendung findenが生成されるメカニズムを明らかにする。この生成メカニズムを明らかにする際、本稿では語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure、以下LCSと記す）の考え方を援用する。LCSは1990年Jackendoffにより提唱された考え方で、動詞の意味を術語概念を用いて記述したものである。影山（1996）ではLCSについて次のようなモデルが提示されている。LCSの全体（達成accomplishment）は上位事象と下位事象から成り、上位事象はACT（活動activity）、下位事象はBECOME（到達achievement）とSTATE（状態state）から成る。全ての動詞は上位事象のみから成るもの（非能格動詞）、下位事象から成るもの（非対格動詞）、そして上位事象と下位事象の結合から成るもの（使役他動詞）に分類される。[10] 機能動詞構造では基礎動詞が名詞化されデキゴト名詞がその構成要素となるが、名詞化されても動詞のLCSが何らかの形で残る。影山が提唱する概念構造モデルに従って動詞gebrauchenと動詞verwendenのLCSを記述すれば、次のようになろう。

動詞gebrauchen：event［x ACT ON y］
動詞verwenden：event［［x ACT］CAUSE［y BECOME］］

上記のLCSの項xは動作主を表す。項yは動作の対象であるが、gebrauchenの場合、動作に参与していても結果的に変化するものではない。従ってこれをON yで表す。動詞verwendenの場合、4格で表示された項が結果的に変化する。これを［y BECOME］表す。gebrauchenは動作のみを表すが、verwendenは動作の結果をも含む。さて、動詞machenは「～をする」という意味である。この動詞のLCSは［x CONTROL［ ］］として表示することが出来る。[11] ここで次の例（11）の文の生成を考えてみよう。

（11）Er macht Gebrauch von dem Messer.

ここで機能動詞とデキゴト名詞の融合について考える。すなわち機能動詞machenの空いた項にデキゴト名詞Gebrauchが挿入され、LCSの融合が起こるのである。

Er gebraucht das Messer. ［x ACT ON y］

↓

NA Gebrauch：［event［x ACT ON y］］

↓

FV machen：［x CONTROL［...］］

すると融合されたLCS［x CONTROL［［event［x ACT ON y］］が得られる。ここでデキゴト名詞の項xとCONTROLの項xに同一指示が与えられる。また融合されたLCSの波線部全体がACTとして見做される。こうして結局、機能動詞構造はx ACT in DO mannerと解釈されることになるのである。このin DO mannerは融合されたLCSのACTの様態を表すもので、ここではDOという動作の強調を表す。例（11）の場合、同一指示が与えられたxiに主語erがリンクされ、ON yにvon dem Messerがリンクされる。こうして「彼はナイフを使う」という意味が読み取られることになるのである。

FV+NA：［x CONTROL［［event［x ACT ON y］］

同一指示

［xi CONTROL［［event［xi ACT ON y］］

↓ er　↓ ACT　↓ von dem Messer　in <DO> manner

さて動詞findenは「～を見いだす」という意味である。ところが英語の意志動詞findとは異なり、自ら探して何かを見つけるという意味ではなく、何かが目に入るという無意志動詞である。このことは英語の命令文が可能であるのに対して、ドイツ語の命令文が不可能であることにも現れている。[12]

（12a）Find a taxi!

（12b）*Finden Sie bitte ein Taxi!

このようにドイツ語の動詞findenはそもそも無意志的な意味を有し、この無意志性が文法的機能として働き受動表現が可能となる。従ってfindenのLCSをEXPERIENCEを用いて表示することが出来る。[13] 項yはfindenの主語が内項であることを示す。さて、ここで次の例（13）の文の生成を考えてみよう。

（13）Das Geld findet Verwendung.

動詞verwendenのLCSは既述のように、[x ACT] CAUSE [y BECOME] である。つまり上位事象と下位事象から成るが、動詞が名詞化されると下位事象の部分だけが抽出される。こうして [y BECOME] のLCSを有するデキゴト名詞Verwendungが派生され、これが機能動詞findenのLCSに代入されることになるのである。

Er verwendet das Geld. [[x CAUSE [y BECOME]]

NA Verwendung：[event [y BECOME]]（波線部だけが抽出される）

FV finden：[y EXPERIENCE [BECOME [y BE ATz]]

動詞findenのLCSはyが置かれた状況zを既述した [y EXPERIENCE [BECOME [y BE ATz]] である。さてzの項にVerwendungのLCS [event [y BECOME]] が挿入されると、[y EXPERIENCE [BECOME [y BE AT [$_{event\alpha}$ [y BECOME]]]] が得られる。この概念構造の内項yどうしに同一指示の規則がかかり、またこのLCSの波線部全体がEXPERIENCEと見なされる。その結果、y EXPERIENCE in MEET WITH mannerと解釈されて、「お金が使用される」という意味が自然に読み取られることになる。なおこのMEET WITHというのは、「経験する」という意味であり、コトの成り行きを経験するという受動的な意味を表す。

FV+NA：[y EXPERIENCE [BECOME [y BE AT [event [y BECOME]]]]

同一指示

[yi EXPERIENCE [BECOME [yi BE AT [event [yi BECOME]]]]

Messer　　EXPERIENCE　　in <MEET WITH> manner

さて、本稿の冒頭で見たようにデキゴト名詞Gebrauchが機能動詞findenと結びついた次の文は非文である。

（14）*Das Messer findet Gebrauch.

何故、こうした機能動詞構造は非文となるのであろうか。もし仮にデキゴト名詞Gebrauchが機能動詞findenのLCSに代入される状況を考えてみよう。

Er gebraucht das Messer. [x ACT ON y]

NA Gebrauch：[event [x ACT ON y]]

FV finden：[y EXPERIENCE [BECOME [y BE ATz]]

融合の結果、LCS [y EXPERIENCE [BECOME [y BE AT [$_{event\alpha}$ [x ACT ON y]]]] が得られる。そしてこのLCSの各項に同一指示の規則がかかるが、そもそも項yは内項であるのに対して項xは外項である。つまり外項xの外側に内項yが位置することになり、同一指示が不可となる。従ってDas Messer findet Gebrauchは非文となるのである。

FV+NA：[y EXPERIENCE [BECOME [y BE AT [event [x ACT ON y]]]]]

×

同一指示不可

（外項xの外に内項yがあるため）

このように行為中心動詞は、findenを用いて機能動詞構造を作ることが出来ないのである。さて、本稿の冒頭ではデキゴト名詞Verwendungが機能動詞machenと結びついた次の文も非文であることを見た。

（15）*Er macht Verwendung von dem Geld.

仮にデキゴト名詞Verwendungが動詞machenのLCSに代入される状況を考えてみよう。

Er verwendet das Geld. [[x CAUSE [y BECOME]]

NA Verwendung：[event [y BECOME]]

FV machen：[x CONTROL [...]]

すると融合されたLCS [x CONTROL [[$_{event\alpha}$ [y BECOME]] が得られる。そしてこのLCSの各項に同一指示の規則がかかるが、そもそも項yは内項であるのに対して項xは外項である。つまり外項xと内項yが同一文の中に存在することになり、同一指示が不可となる。こうして *Er macht Verwendung von dem Geld. が非文となるのである。

FV+NA：[x CONTROL [[event [y BECOME]]

×

同一指示不可

（外項xと内項yが同一文の中に存在）

このように結果中心動詞は、machenを用いて機能動詞構造を作ることが出来ない。以上

が本稿の冒頭に述べた例（1）と（2）の疑問に対する解答であり、これこそLCSによる機能動詞構造生成の一端を示すものである。

4　おわりに

本稿はコーパスを用いた実証的分析により、まず動詞gebrauchenとverwendenの意味的相違を明らかにし、そして動詞gebrauchenの機能動詞構造Gebrauch machenとの比較、また受動態verwendet werdenのVerwendung findenとの比較により、それぞれの表現上の特徴を明らかにした。さらに語彙概念構造（LCS）の理論に基づいて、基礎動詞から機能動詞構造が生成されるメカニズムを明らかにした。動詞gebrauchenはそもそも「行為中心」の意味を有し、機能動詞構造化されることによって「行為中心」の意味が強調される。これは4格目的語の位置に行為中心のデキゴト名詞が置かれるからである。また動詞verwendenはそもそも「結果中心」の意味を有し、機能動詞構造化されることによって「結果中心」の意味が強調される。これは受動表現に比べて動作主の表示を完全に消し去り、結果だけを抜き出すことが出来るからである。本稿では実証的分析によりこうしたことを明らかにしたが、「使用」の意味を表す動詞はgebrauchenやverwendenのほかbenutzenもよく使われる。動詞benutzenの場合、変化しないモノが4格目的語として置かれるという点からすれば、動詞gebrauchenに近いが、「話者のコントロールが及ばない施設、設備」に限定されるという点でgebrauchenとは異なる。[14] たとえば、

（16a）Er benutzt die Bibliothek.
（16b）*Er gebraucht die Bibliothek.

「図書館」という施設は、小さな「フライパン」とは異なる。「施設」は物理的にも大きな存在であり、話者が自由にコントロール出来る「道具」ではない。従って（16b）は非文となるのである。名詞化したデキゴト名詞Benutzungと機能動詞が結合する機能動詞構造は存在しないため、本稿では取り扱わなかったが、なぜ機能動詞と結合しないのかという点は今後の研究課題である。機能動詞構造はデキゴト名詞の特性、そして機能動詞の特性との微妙なマッチングの結果として生み出される。語彙の頻度調査やインフォルマントテストなど現実の使用状況における調査を通して、こうしたマッチングの実態を分析することが必要である。LCSは机上の空論ではなく、言語の実態を踏まえた理論である。実証的分析を踏まえ、更にLCS生成の実態を解明したいと考えている。

（インフォルマントとして協力を惜しまれなかった愛知教育大学のOliver Mayer氏に感謝の意を表する。）

参考文献

Duden (1977): *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache*, In 6 Bänden, Mannheim/Wien/Zürich, Dudenverlag

Engel/Schumacher (1976): *Kleines Valenzlexikon deutscher Verben*, IDS 31, Tübingen

Helbig, Gerhaldt (1979): *Problem der Beschreibung von Funktionsverbgefügen im Deutschen*, In: Deutsch als Fremdsprache 16

Helbig/Schenkel (1983): *Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben*, VEB Bibliographisches Institut, Leipzig

Jackendoff, Ray (1990): *Semantic Structures*, Cambridge, Massachusetts, MIT Press.

Leisi, Ernst (1953): *Der Wortinhalt*, Quelle u. Meyer, Heidelberg

Polenz, Peter von (1955): *Funktionsverben im heutigen Deutsch*, Wirkendes Wort 17, München

影山太郎（1996）:『動詞意味論：言語と認知の接点』くろしお出版

影山太郎（2011）:『名詞の意味と構文』大修館書店

小林英樹（2004）:『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房

在間進（1998）:「ドイツ語他動詞の[行為中心性]と[結果中心性]」『ドイツ語の統語的意味的生成メカニズム』東京外国語大学 所収

納谷昌宏（1989）:「機能動詞 finden に関する一考察」『関西学院大学 人文論究』第39巻 第1号

納谷昌宏（1993）:「機能動詞構造の生成メカニズム」日本独文学会『ドイツ文学』第90号

納谷昌宏（2004）:「機能動詞の生成に関する一考察」『ドイツ語学の諸相』郁文堂

納谷昌宏（2016）:「動詞の名詞化と機能動詞構造 ―動作名詞 Diskussion の場合―」『愛知教育大学研究報告 人文・社会科学編』第65輯

コーパス

「Cosmas II」IDS (Institut für Deutsche Sprache), Mannheim

注

[1] Duden（1977），Band 3, S.955 を参照のこと。なお、a)～d）の記号は用法を明確化するために筆者がつけたものである。Duden のほか Langenscheidt, Klappenbach, Wahrig の辞書も参照したが、紙面の余裕がなく、ここでは Duden の記述を代表として挙げるに止める。

[2] コーパスでランダムに事例を収集したが、St. Galler Tagblatt, Mannheimer Morgen, Salzburger Nachrichten などの出典に偏る傾向があった。本稿の事例も St. Galler Tagblatt が中心である。

[3] COSMAS II を用いて収集した事例は150例であるが、ここで全ての4格目的語を記載する紙面の余裕はない。ここでは最初の例から順次約20例を記載するに止める。

[4] Duden（1977），Band 6, S.2789 を参照のこと。

[5] 変化しないモノが動詞 verwenden の4格目的語に置かれることも多々ある。しかし用いられた文脈を慎重に検討すると、やはりそれが「道具」ではなく、テーマとなっていることがわかる。言語の実相というのは微妙なものであり、単純なものではない。事例を注意深く検討することが必要である。

[6]「行為中心」と「結果中心」の概念について、詳しくは在間（1998）を参照のこと。

[7] ここでは収集した150例について頻度調査を行った。語の後ろに記載した数字は見つかった事例の総数である。

[8] verwenden の受動には verwandt werden という形もあるが、コーパスでは「似通う」という意味での使用が多く、ここでは verwendet werden での検索に絞った。

[9] 本稿ではデキゴト名詞が生み出されるメカニズムを LCS を用いて説明する。もともと LCS は生成意味論の語彙分解から発展した概念であり、従って「派生」ではなく、「生成」という用語を用いる。

[10] 影山（1996），S.47 を参照のこと。

[11] 動詞 machen は特殊な LCS を有する。通常ならば項 y が置かれる部分が空欄となっている。これは行為の対象が動作であるからである。なお、小林（2004），S.48 においても、日本語動詞「～する」の LCS に関する記述がある。

[12] E. Leisi, Der Wortinhalt（1953），S.106を参照のこと。
[13] EXPERIENCEはCONTROLの下位概念であり、その主語は経験者Experiencerとして位置づけられる。詳しくは影山（1996）S.82を参照のこと。
[14] Helbig/Schenkel（1983）S.160を参照のこと。

（2016年9月7日受理）